6.平面計画・ゾーニング

４つの「環」で編み分けるグラデーション空間
人と人が出会いながらも、自分らしく穏やかに暮らすためには、プライベートからパブリックへと領域を丁寧に編み分けることが重要である。本計画では、住まいを段階的に4つの“環”として構成し、異なる距離感の中で自然な交流が生まれる空間計画とした。

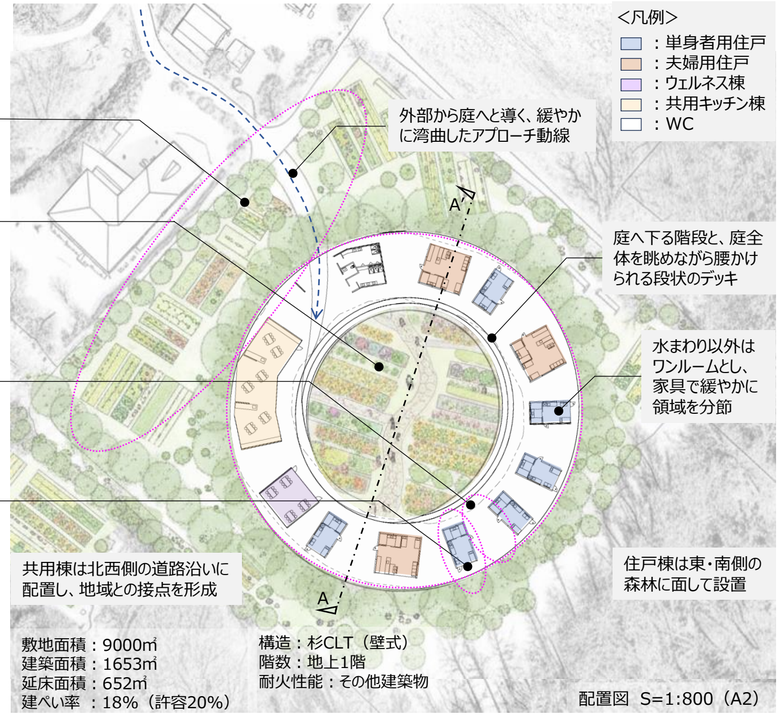
① 外の環（パブリック） ｜環の外側の畑や小道
環の外周に広がる、地域住民や旅行者にも開かれた公共的な領域。食やイベントを介して、暮らしが地域へと自然ににじみ出し、新たな関係を生み出す場となる。

② 庭の環（セミパブリック） ｜環の内側の畑や小道、共用棟
入居者全員が共有する庭でありながら、地域の人々も立ち寄ることができる緩やかな交流の場。畑作業や会話、季節の変化を通して、人と人のつながりがゆっくりと育まれる。共用キッチンでは畑で採れた野菜を振る舞い、ウェルネス棟では日常的な健康管理や必要に応じた医療サポートが受けられるなど、コミュニティを支える生活拠点となる。

③ 縁の環（セミプライベート） ｜住戸前のベンチや棚
住戸前に設けたカウンターやベンチは、自作の作品や調理した料理を並べられる“小さな縁側”として機能する。住民同士が自然に声をかけ合い、日常の延長としてささやかな交流が生まれる半個人的な領域である。

④ 内の環（プライベート） ｜各居室の室内と縁側
静かに過ごすための個人の領域。森に向けて開かれた落ち着いた場所で、自分の時間をゆったりと楽しむことができる。

これら4つの環が重層的につながることで、人と人、人と自然がゆるやかに循環する暮らしが形成される。内側から外側へグラデーションのように広がる空間構成は、多様なスタイルの “いきいきとした暮らし”を受けとめる基盤となる。

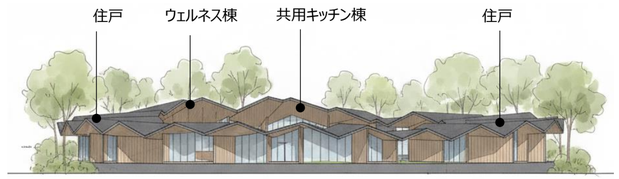


配置図 S=1:800（A2）

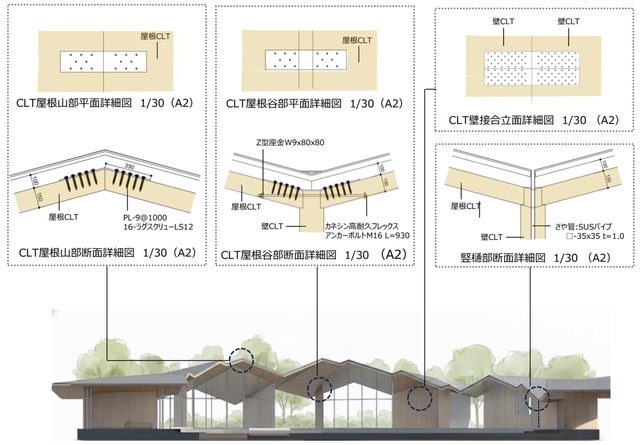
7. 立面・断面計画

風景との調和をもたらす折れ屋根の稜線
本計画の立面・断面構成は、富士山や周囲の山稜に柔らかく呼応する折れ屋根の連続によって構成されている。住戸部分の屋根は高さを抑え、人のスケールに寄り添う落ち着いたプロポーションとした。一方で、共用キッチン棟やウェルネス棟など、人が集まる場所では屋根を山のように緩やかに持ち上げ、内部に明るさと開放感に満ちた空間を確保している。こうした屋根の高低差が生むリズムは、外側からは連なる稜線として風景と自然につながり、内側からは建物全体を包み込むような安心感のある佇まいを生み出す。折れ屋根の形状そのものが、暮らしの場の特徴と周囲の景観の豊かさを同時に映し出す要素となっている。

外観



東立面 S=1:600（A2）



A-A'断面図 S=1:600 （A2）

アプローチ（パブリック）
外部から自然と庭の方に歩かせる流れるようなアプローチ。道の先に花畑が見える。

キッチン棟（セミパブリック）
地域の人々も立ち寄ることができ、季節の変化を通して入居者とのつながりが育まれる。

各住戸前の空間（セミプライベート）
住民が自ら育てた野菜や作った作品を並べることのできる縁側のような場。

夫婦用住戸（プライベート）
室内環境計画より水廻り以外はワンルームとし、家具配置でなだらかに領域を分ける。

8. 耐震性

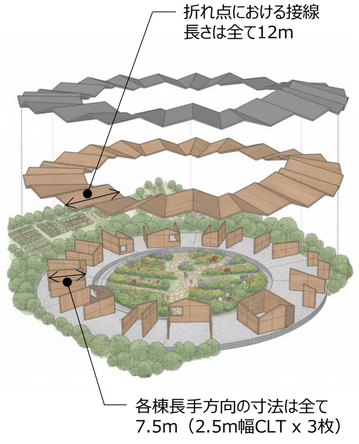
CLTパネルの分散配置による耐震構造
CLTパネルを耐力壁と屋根パネルに用い、各接合部には山形金物やラグスクリューボルトを採用することで、高い構造安全性を確保している。CLTの最大幅寸法を2.5m以内に統一したモジュール寸法とし、住戸の長手寸法を7.5m（2.5m幅CLT×3枚）で構成することで、施工精度の向上・品質の均一化・コスト合理化を同時に達成している。また、住棟を放射状に配置し、CLTパネルを耐力要素としてバランスよく分散させることで、地震力を面的に受け止め、環状の建物全体で受け流す構造計画とした。

9. 防耐火

現し利用と金物保護を両立した耐火ディテール
本計画は延床面積652㎡（1,000㎡以下）とし、法的には準耐火構造の義務はない規模である。しかし、CLTを長期にわたり健全に使い続けることを重視し、独自の耐火ディテールを採用している。主要な金物接合部には、燃えしろ厚さ分の埋木を施し、火災時の温度上昇から金物を保護するとともに、日常的な湿気による腐食も防止する。これにより、CLTを現しで見せながらも構造安全性と耐久性を高めた木造建築として成立させている。

10. メンテナンス性・耐久性

軒下を深く確保することでCLTが直接雨に触れない納まりとし、木材の劣化を抑える計画としている。外部の木部には、透湿性・耐候性に優れたシリコン系クリア塗装を施し、素材の風合いを保ちながら耐久性を高めている。また、建物は平屋構成で、高所作業の必要がなく、足場を組まずに外部木部の再塗装や点検を行うことができる。これにより、維持管理コストと環境負荷を抑えた、持続的に使い続けられる木造建築を実現する。



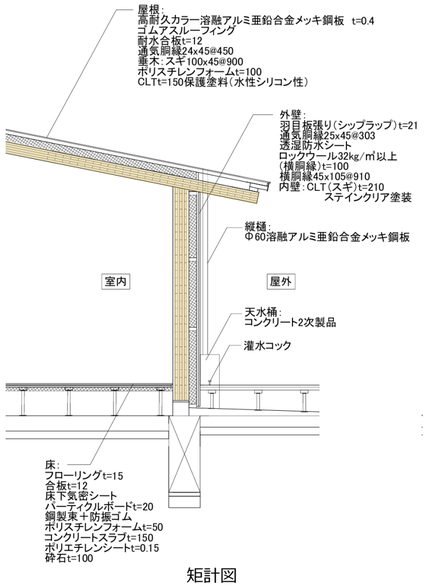
分解パース

11. 室内環境性能

自然エネルギーを最大限に生かす持続可能な住まい
外皮は高断熱・高気密仕様とし、建物全体の熱損失を抑えることで、パッシブデザインによる暖冷房負荷の低減を図っている。V字型の折れ屋根で集めた雨水は、貯留槽を介して畑の散水やトイレ洗浄水に再利用し、敷地内で循環する水資源として活用する。さらに、CLTの蓄熱・調湿特性が、設備に過度に依存しない快適な住まいをつくり出す。自然エネルギーを最大限に引き出すことで、持続可能な生活環境を実現する計画である。

12. 環境計画

「外断熱×CLT現し」による蓄熱体としての建築
CLTを室内側に現しつつ外側を断熱材で包む「外断熱×木質内装」とすることで、建物全体を大きな蓄熱体として機能させる。また、木製サッシと高断熱ガラスを用い、気密性能に優れたドレーキップ仕様とすることで、CLTの蓄熱特性を最大限に活かし、年間を通して穏やかな温熱環境を維持する。空調は「放射＋微風量空調」を組み合わせ、住戸の床下に設けたチャンバーを利用して緩やかに空気を循環させる。過度な送風に頼らず、ドラフトの少ない快適な温熱環境をつくる。水まわり以外をワンルームとし、家具で緩やかに領域を分ける構成は放射空調と相性が良く、温熱ムラを抑えながら柔らかな生活動線を生み出す。「外断熱×CLT現し×床下空調×ワンルーム」という構成が、自然素材の心地よさと省エネルギー性を両立させた健やかな室内環境をつくり出す。



矩計図

13. サーキュラーエコノミー

木材を最後まで使い切る循環型木質建築
CLT製造時に生じる端材はチップ化し、燃料や農業用マルチ材のほか、木質ボーラスコンクリートとして外構舗装に再利用する。透水性・保水性をもつ舗装は、雨水を地中に還し、気化冷却によって歩行環境を快適に保つなど、敷地全体の環境性能向上にも寄与する。建物に用いたCLTは、金物接合による可逆的なディテールとし、解体後はベンチや家具へと再生利用できる構成とした。このように、構造材・端材・敷地環境が連続して循環し、建物自体が地域の資源循環に参加することで、木材を最後まで使い切る循環型木質建築のモデルとなることを目指している。

14. SDGs

「三つの環」が具現化する持続可能な未来
本計画は、CLTを活用した木造集合住宅として、「木・水・人の三つの環」を通じて、SDGsの主要な目標達成を具体的に具現化する。

- CLTによる木の住まいを環境に配置する建築は、住民と地域の人々が共に育てる「住み続けられるまち」の新しいかたちを示す。（SDGs 11）
- 畑やキッチンを通して「資源・食・人の循環」をデザインすることで、「つくる責任・つかう責任」を実現する。（SDGs 12）
- 再生可能エネルギーと木材の炭素固定効果※1)を組み合わせることで、温室効果ガス削減に寄与し「気候変動に具体的な対策」を実践する。（SDGs 13）
- 建築で使用する木材を地域林業と連携して調達することで、森林資源の再生と循環を促し、森と人の営みを未来へとつなぐ。（SDGs 15）

三つの環が重なり合うこの計画は、人と自然が持続的に共生する地域社会のモデルとなることを目指している。

※1）CLT使用量：46.5㎥、炭素貯蔵量：42tCO2